

■ 編集委員

齋藤 一之（委員長）

梶田 真澄	板橋 明	糸山 進次	小山 勇	清水 道生	鈴木 洋通
竹内 勤	土田 哲也	西村 重敬	松下 祥	丸山 敬	持田 智
渡辺 修一（五十音順）					

■ 編集後記

評価主義が横行している。独りよがりにならず、様々な立場の方々と議論は、さらなる飛躍にしばしば有益なことは確かである。しかし、その意見を取り入れるか、あるいは、あくまで自説をまげないで驕進するかは、本来、できるかぎりその研究者自身の判断を尊重すべきであろう。また、多くの場合、外部評価はその時点での常識的な判断となってしまう、飛躍の足かせになることもあろう。

評価はあらゆる意味で研究内容を吟味し理解した上で行われることが望ましい。が、現実はこちらも「客観的な指標」と称されるインパクトファクターの高い学術誌の数がまず評価対象となることがおおい。本来は、掲載雑誌ではなく、その内容を評価すべきである。たしかに一流誌には重要な課題やすばらしい報告も多い。しかし、なかには捏造とされるような論文まである。捏造であるかははっきりしないが、追試不可能な論文は散在し、時として、その情報は公表されず学会会場などでの裏話として流れている。そうはいうものの、ついついNature, Science, Cellなどに載っていると、あまり読みもせずに、すばらしい論文なんだろうなと思ってしまう。また、これらの著名学術誌には高度な技術を駆使した膨大な実験に基づいた論文が多いことも事実である。そして、誰もが目を通しており、これらの雑誌に掲載されただけで、その論文は一定の評価を得られ、引用されることも多くなる。もっとも、PubMedなど無料文献検索の進歩のおかげで、非常にマイナーな雑誌であっても、内容が伴っていればきちんと引用され、適切に評価されるようになってきた。

本来なら、英語以外の論文も同等に評価されるべきであるが、読むことができればどうしようもない。我々もスワヒリ語はもとより、中国語、韓国語の論文を読むこと（読めること）はほとんど無いだろう。残念ながら和文論文にpriorityが認められることはほとんど無い。日本人研究者でさえ、和文総説は勉強のためには読むが、英文原著で和文原著を引用文献として選ぶことは少ないのではないだろうか。インターネットでも膨大な情報はほとんど英語である。埼玉医科大学雑誌が広く読まれるためにも、原著はThesisを含めてできる限り英文にするべきと思う。初めて学術論文を書く学位申請者にはかなりの負担になると思う。しかし、最初の一回を膨大な時間を費やしてでも自分で書きとおせば、次はかなり楽になる。また、留学したときや海外研究者との交流時などでは、英語論文であれば、それがどのような雑誌に掲載されていると、興味のある研究者は必ず読んでくれて重要な自己アピールとなる。今後、英文での投稿が増えることを望んでいる。

（丸山 敬）

埼玉医科大学雑誌

<http://www.saitama-med.ac.jp/jsms/>

第 32 巻 第 3 号 通巻 118 号（季刊）

編集責任者 齋藤 一之

平成 17 年 6 月 30 日 発行

発行所 埼玉医科大学医学部

350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 38

電話 049(276)2125(直通) FAX 049(276)2127 E-mail: igakkai@saitama-med.ac.jp

郵便振替 00540-6-19727

制 作 株式会社アテネデザイン

東京都港区三田 1-11-19 小宮ビル 2 階 電話 03(3456)5741(代) <http://www.atene.co.jp>